

学びの多様化ー共に学びあう関係づくりー

今回、「学びの多様化」を特集テーマにした背景には、学びが一方的・画一的・受動的に行われている日本の学校教育へのアンチテーゼとして深める必要があると感じたからである。

この間、協同総合研究所では多くの大学でワークスコープに関わる講義を展開している。そのときに、学生からは「ワークショップを通じて自分の問題意識が鮮明になった」「自らの経験や考えをアウトプットすることの大切さを知った」「今までこのような参加型の講義がなかった」などの意見が出る。講義内では、学生は学ぶ当事者であることを位置づけ、講師が話し続けるのではなく、学生の問題意識・関心に沿って、学生同士の対話、学生と講師者の対話と討議をアクティブラーニングとして行なっている。学生の反応を見ていると、学ぶ＝「教えてもらう」という感覚がとても強いと感じる。それは学生の問題というよりも、明治時代以降、戦前は富国強兵、戦後は経済成長のために、ある一部の人によってつくられた教科書に書かれた内容をどれだけインプットしているのかというテストが学びの評価指標として存在することに問題がある。つまり、あらかじめ用意された問題に対して、すでにある答えをその答え通りに応答することに絶対的価値がある教育となっている。

しかし社会を構成する人間は、元々1人ひとりが違う価値・信条・生き方を求めている。また社会問題が増える中で、その解決策は1つではなく、複数あるときもあれば、全くないこともある。その意味でも、一方的・画一的・受動的な学びのあり方はすでに破綻したと言っていいのではないか。その情勢のなかで、国は「教育機会確保法」(正式には「義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律」)を2016年12月に成立させ、フリースクールや夜間中学などが学びの場であることを位置づけた。

そこで、本誌では、特に学びのあり方、学ぶ場の環境設定について取り上げている。

世田谷区長で教育ジャーナリストの保坂展人区長と古村伸宏協同総研理事長との対談

では、学ぶことそのもののあり方を中心に対談するとともに、学ぶことに関わる問いを多く提起した対談となっている。

森康行さんには、教育機会確保法での学びの場である「夜間中学」の現状を描いた映画「こんばんは」「こんばんは2」の監督として、多くの背景を持った方々が通う夜間中学の取り組みのなかで、学ぶことそのものの意味を考察していただいた。

ワーカーズコープちば、フリー★スタディ習志野の責任者の渡辺伽奈さんには、学習支援事業の実践と課題を生徒の生活まるごとを捉える視点から記載いただいた。労協連の加盟団体で、生活困窮者自立支援事業の学習支援を35か所運営しているが、その1つの実践として、狭い意味での学習支援だけではない生活そのものを考えるソーシャルワーク的観点を持つことが、学びを促進する大きな意味を持つと考えている。

最後に、APDEC (アジア・太平洋デモクラティック教育大会) [オーストラリア]の様子をワーカーズコープで働く清水武徳さんに書いていただいた。この大会は、フリースクールや家庭内教育で育つ子どもたちの教育大会であり、多様な学びの場の実践を話しあう場となっている。報告を通じて多様な学びの場が持つ意味を考える報告となっている。

フリースクールや夜間中学などは、既存の学校に対して、オルタナティブスクール(もう一つの学校)と言われるが、それはオルタナティブではなく、学びの場のモデルになると感じている。多様な学びの場(学校)があることによって、多様性のある健全な社会をつくる礎になると考えている。

特集全体を通じて、学ぶことの意味を深める内容となっており、学びの環境設定として多様性 (Diversity) ・民主主義 (Democracy) ・対話 (Dialogue) の「3つのD」を担保することが必要であると感じた。「3つのD」は沖縄県の玉城デニー知事が掲げているが、これは学びの場だけではなく、政治・社会全般でも求められることでもあろう。そのような環境を協同組合全体の中でも自らの実践としてつくっていききたい。

相良 孝雄(協同総合研究所 事務局長)